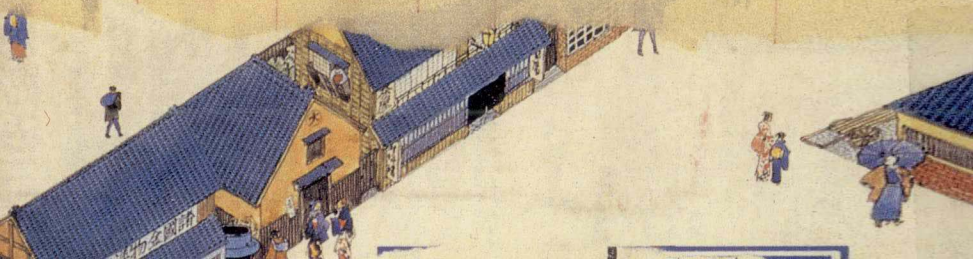


井上ひさし エッセイ集 7

悪党と

幽霊

井上ひさし



悪党と幽霊

エッセイ集 7

井上ひさし



中央公論社

悪党と幽霊

エッセイ集 7

一九八九年五月二〇日初版印刷
一九八九年五月二〇日初版発行

著者 井上ひさし

発行者 嶋中鵬二

印刷 精興社
製本 大日製本

発行所 中央公論社

〒104 東京都中央区京橋二丁目一七

番 振替 東京二二三四

◎一九八九 検印廃止

ISBN4-12-001800-8

目次

悪党と幽霊

芸談スクラップ

双子花瓶の話

世は「平等」ばやり―私の「ぶんか論」

生きた教材―貿易摩擦

人びとのことばを―アジア・アフリカ・ラテンアメリカ文化会議に参加して

二十一世紀へのバイブル

だれのための教育か

私の教科書検定論―復古調『高校日本史』を読んで

*

彼の前に帽子を脱ぐ理由

銀座礼讃

日本の「文化感知器」——有楽町にまた人が湧いてきた

私の転機——米屋の奥さんの足音

クリスマスの思い出

はじめての万年筆

ファッションと私

本とわたし

銭

木村教信者の弁

キャンベラの司馬さん

最前衛を突っ走った夷斎先生

*

悪党と幽霊

62

66

73

76

80

82

86

89

91

94

98

102

児童文学名作全集解説

昭和庶民伝三部作を書き終えて

146 125

前口上

小林一茶

157

改稿雑感―新・道元の冒険

163

「ことばを預かる質屋」の意味―国語事件殺人辞典

166

大芭蕉と小芭蕉―芭蕉通夜舟

168

小沢昭一の二つの冒険―唐来参和

170

楽天家諸氏に脱帽―キネマの天使

172

*

日本人のへそ

174

きらめく星座

176

國語元年

イーハトーボの劇列車

泣き虫なまいき石川啄木

花よりタンゴ

雨

闇に咲く花

雪やこんこん

長屋の仇討

軽演劇の時間

演ずるバリ島

軽演劇の時間

悪党と幽霊

エッセイ集
7

悪党と幽霊

芸談スクラップ

近代上方歌舞伎で初世中村鴈治郎と芸を競い合った二世実川延若（一八七七・明治一〇—一九五一・昭和二六）がこんなことを云った。

《早い話が、「先代萩」御殿で政岡が鶴千代と千松を使って、一生懸命で愁嘆場をやっているのに、お客様が誰一人泣いてもいないで、あくびばかりしては芝居になりません。（略）そこが活動写真などと違うところで、芝居ではお客様の気持がそのまま舞台へ伝わってまいります。私が政岡を演っている。お客様が、あちらでもこちらでも泣いてくれる。（略）それを舞台から見ていると、政岡の私もツイそれに釣り込まれて本当に泣いて来る。こうならねば、決していい芝居は出来ません。即ち役者が客を泣かせ、そして客がまた逆に役者を泣かせるのです。いいかえますと、この場合、客は芝居を見ているのではなく、客が役者に芝居をさせているわけでございます》（山口広一編『延若芸話』）

もうひとつ筆者の好きな芸談を切抜き帳から書き写しておこう。今度のは、六世尾上菊五郎

(一八八五・明治一八一—一九四九・昭和二四)の芸談である。

《……とにかくおやじの稽古づけは厳格で、台詞なども八釜敷くて——尤も団十郎もそれは同じだったが——声の使い方は堂に入っていた。この頃でも随分台詞の大きな人はありますが、それは結局竹法螺たけばらも同然なのが多い。「聞かせちゃいけない、聞かれろ」というのが台詞の秘訣、「見せちゃいけない、見られろ」というのが芝居の極意なんです》(黒崎貞治郎『芸談百話』)

そういえば徳川夢声の「講演の第一声について」という秘伝も、切抜き帳に書き留めてある。

——とここまで書き進めてきて気がついたが、筆者は「切抜き帳」について、なんの説明もほどこしていなかった。読者諸賢に一刻も早く自分が蒐集した芸談をお目につけようと焦るあまり、筆者は必要な手続きをすっかり忘れてしまっていたようである。しばらくは横道に逸れて(あるいは本道に立ち帰って)この切抜き帳の由来を説明させていただくことにしよう。

筆者はかねてから「送り手と受け手との関係」に興味を抱いてきた。作者が作品を書き上げた途端、その作品は完成したのである、というのが世間一般の常識のようだけれど、筆者はまったくそうは考えない。もし作者が作品を自分一人を読者と仮定して書いたのであれば、脱稿と同時に完成と考へても間違いではないが、その原稿を複製するため編集者に渡す予定がいささかでもあれば、脱稿しただけでは作品はまだ完結していない。端的に云えば、自分以外に読者を想定した瞬間から、その作品は作者のものであると同時に、読者のものでもあるという塩梅になるのだ。そこで読者が読み終えてはじめてその作品は完結するということになるのである。筆者がいま述べていることがらの本質は、たとえば蒟蒻こんじやくについて思いをめぐらせてみても判然とする。いま、

だれかが自分のために蒹蕪をこしらえている。その限りでは、その蒹蕪がどんな形をしていようが、その味がたとえトコロテンそっくりであろうが、たいした問題ではない。とにかく彼が「やれやれ、とにかくにも蒹蕪ができた」と咬いたとき、疑いもなく蒹蕪ができたのである。その同じ彼がほかの者にも蒹蕪をたべてもらおうと思うなら、その蒹蕪にはやはり蒹蕪らしい歯ごたえがなければならず、味もトコロテンのようであってはず、それよりもなによりも彼は、ほかの者がその蒹蕪をたべ終るまでは、自分の仕事はまだ終っていないと感じつづけるはずだ。ましてや彼がプロの蒹蕪づくりならば、彼の蒹蕪を買う客の味覚を探查しつつ、「これこそ客もよろこんで舌鼓を打ち、自分もコレが蒹蕪だと信じられるものをつくろう」と日夜励むであろうことは、まずたしかである。以上を七面倒にいえば、主体（職人）の主観はつねにきびしく客体（客）によって客観化されなければならず、その作業を通して得たものを主体は次の主観に注ぎ込み、たえず主観の客観化を図ること、これが蒹蕪職人の仕事なのだ。このように客なしでは蒹蕪職人はほとんど存在し得ないのだが、同じことは作者の仕事についても云えるのであるまいか。

——この理屈があらゆる作者に歓迎されるとはとも思えぬが、少くとも筆者は右のようなことを信じており、とくに戯曲を書く際はこれを金科玉条にしている。いささか不遜な言い草だが、観客を自家葉籠中の物にしたい、これが戯曲作者であるときの筆者の理想なのだ。そのために筆者は二十代の後半から、送り手と受け手との関係について、これはなにか役に立ちそうだな、と思う記述や談話とめぐりあうたびに、それを書き留めることを日課のかわりにしてきた。そのメモ紙の堆積をちょっと気取って「切抜き帳」と呼んでみたわけである。

ところで活動写真とラジオが生んだ大話術家の徳川夢声（一八九四・明治二七—一九七一・昭和四六）の「講演の第一声について」という談話だが、大意はこうである。

「聴衆をこっちから捕えてやろうと意気込むと必ず失敗する。なぜかこっちが意気込む分だけ聴衆が身を引くのである。そこで私は邪道かもしれないが逆手をよく用いる。登壇しても黙っている。客席後方の壁あたりにボンヤリと目をやっているだけで一言も発しない。十五秒ぐらいたつと客席がざわつきはじめる。『夢声のやつ、どうしたんだろう』と気になりだすわけだ。三十秒も黙っていると、客席がシーンと鳴りをひそめる。『理由はわからないが、夢声になにかおこったにちがいない』とやや心配になり、大いに好奇心をそそられるのだ。もう十五秒待つと、客席がひとつになる。『いったいなんだというのだ』とわけがわからなくなり、聴衆はこの宙吊り状態から一刻もはやく脱け出したいと願いはじめる。そしてこの宙吊り状態をなんとかできるのは壇上の弁士夢声ただひとりであるということをはっきり噛みしめる。そして聴衆は夢声の様子をなお一層よくたしかめようとして一斉に首をのびしてくる。そこを軽い冗談かなにか云って、ガッと捕えてしまふんです」

夢声ほど過激ではないが、桃中軒雲右衛門の弟子で、大正から昭和前期にかけて関東節東家派を背負って立った東家楽燕（一八八七・明治二〇—一九五〇・昭和二五）も似たようなことを云っている。

《舞台に登ります心構えは無念無想、きょうは聴衆が多いから、一つきばってやろうという心では必ずうまい調子が出ません。（略）まず二階の正面の客を見る、続いて二階の右の方、左の方、

そして最後にお辞儀する段になって、初めて土間の客を見る、それから徐ろに聴衆の視線を高座の小さなテーブルに集めるのです》(黒崎貞治郎『芸談百話』)

声が小さい上に、なぜか濁み声で、こんなひどい声の持主がなぜ文楽の太夫になぞなったのだろうと、若い頃は太いに不思議がられたが、のちに世話物を語らせたなら天下一品と満天下を唸らせた五世竹本弥太夫(一八三七・天保八―一九〇六・明治三九)も云う。

《師匠(弥太夫のこと)言われますに、わしは声はわるいし又腹も薄い(声量がない)故、語るには中々骨が折れる、成る可く真情に近きように語っている、と申されました。また、凡て子供の役でも、語る時に泣いて語ると聞く方が泣かず、却てスラ／＼と語ると聞く方が泣く。例えて云えば、彼の鳴門の八ツ目の子役おつるでも、あまり泣いて演ると、早熟くさって憎気が出て、憂いが利かぬ。子供らしくにサラ／＼と文句だけで演る心得で語ると、聞く人はきっと泣く、と話されました》(木谷蓬吟『芸の六十年』)

元茨城県警・警備部長で警視正の江間恒(一九一一・明治四四―八二・昭和五七)は池田峰雄元共産党代議士に尾行の秘訣をこう語っている。

《たとえば駅の改札口。私は切符を持たないであそこを出ろといわれたら絶対に出ます。全然相手(改札係)が気がつかない。それはね、呼吸の問題。相手が何の不審も感じない、通ったことさえもわからない。現に自分の目にはちゃんと映じているんですけども、それをとがめ立てようとする気がおこらない。(略)あそこ(改札口)で手帳を出したらおしまいですよ。ある訓練で地下鉄の改札口で張り込む者がね、変なところで警察色を出したらおしまいですよ。ある訓練で地下鉄の改札口で

「改札さんは全然オレを知らない。(略) オレやってみるから、おまえらはここで見ていろ」と生徒をおいといて実行して、何回通っても一言もいわれない。とがめようという気配さえ感じません。ごまかして通ってやれと思うから相手にピンとくるんですよ。要するにね、相手が殺意を感じるのと同じですよ。こっちに全然そういう気がなかったら(略) 全然気がつかない。出し忘れたぐらいの調子ですうっとやってごらんさない」(「赤旗評論特集版」昭和六一年十二月二十九日付)「切抜き帳」にはごく最近の事例ものについて、もっとも新しいのはこうである。

《女性名義のクレジットカードを盗んだ男が、女装してデパートで買物をしようとしたが、ひげとのどぼとけで見破られ、名古屋・中署に詐欺未遂で逮捕された。捕まったのは住所不定、無職、大磯常吉(二一)。調べでは、大磯は先月二十七日、名古屋市西区の駐車場の車の中から、A子さん(四六)名義のクレジットカード一枚とギフト券三万円相当を盗んだ。五日、三つ編みのおさげの付け髪にアイシャドー、口紅をつけ、同市中区の松坂屋名古屋店七階の貴金属売り場で、四十八万円の黒真珠の指輪をこのカードで買おうとした。男物の黒いコートと化粧で隠し切れないひげとのどぼとけから怪しまれ、店員が信販会社に照会、発覚した》(「東京新聞」昭和六二年三月七日付夕刊)

この大磯常吉氏に興味を抱き、ラジオのニュースを追っていると、ラジオでもこの事件を扱っていて、最後にアナウンサーはこんなことを云っていたのである。

「……なお、取調べに対して大磯容疑者は、『女の真似をしようとしたので、かえってひげとのどぼとけが目立ったのかもしれない』と語っていたということですよ」